様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月２５日現在

機関番号：１７２０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００８～２０１０
課題番号：２０５３０８３０
研究課題名（和文）　創造性開発を目指す生活主義音楽科授業構成に関する研究
研究課題名（英文）
A Study of the Organization of Music Instruction in Experience-Centered Curriculum for Developing Creativity
研究代表者
荒巻　治美（ARAMAKI HARUMI）
佐賀大学・文化教育学部・准教授
研究者番号：４０３１５１８０

研究成果の概要（和文）：本研究は、生活主義教育の原理に基づいて構想・実践された音楽科授業構成のあり方を明らかにすることを目的としている。我が国に多大な影響を与えた1920-1960年のアメリカ音楽教育を研究対象とし、教育課程や授業実践記録など、関連する資料を幅広く発掘した。それらを整理・分析することによって、生活主義音楽教育の歴史的展開を概観し、創造性開発を目指す音楽学習の内容と方法を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study is to clarify the organization of music instruction in experience-centered curriculum developed in the United States during 1920-1960. For this purpose, I discover and analyze materials. In the present study, I make a panoptic survey of music education in the United States during 1920-1960 and clear up the organization of music instruction for developing creativity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：音楽教育学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：生活主義，創造性

１．研究開始当初の背景

本研究において課題としている生活主義・経験主義は、国内外における教育を規定する原理の一つである。我が国においてそれは、戦後初期の経験単元による教育として導入され、その後の子ども中心主義教育の基礎となるものであった。その起源の一つであるのが、２０世紀初頭から中葉にかけてアメリカで行われた教育改造運動である。初期に行われたデューイ・スクールを始めとする実験的な教育実践から、リンカーン・スクールなどの進歩主義学校での学習開発へと連なっていき、公立学校における実践へと至る。本研究は、この時期を研究対象として、アメリカ音楽科教育の歴史的展開を概観しながら、生活主義の原理に基づく音楽科授業構成を明らかにすることを目的としている。

本研究課題では、教育学と音楽科教育の領域の先行研究が検討されるべきである。教育学領域における研究は、歴史的に数多く行われてきた。経験主義教育を提唱した多くの教育学者の理論、また、それに基づいて具体的

に内容を組織した各州のカリキュラム、先進的な各種学校で構想・実践されたカリキュラムや学習など、多くの側面から明らかにされてきた。しかし、具体的な音楽学習のあり方については未開拓であった。音楽科教育領域の研究では、Ｊ.Ｌ.マーセルをはじめとする音楽教育研究者の著作などの紹介・分析、当時の音楽科教科書の検討、Ｓ.Ｎ.コルマンの著作の訳出・分析などがなされてきた。しかし、音楽科授業の内容と方法の詳細については明らかにされてこなかった。

このような背景を踏まえて、本研究に着手した。

２．研究の目的

本研究の目的は、生活主義教育の原理に基づいて展開された、音楽科授業構成のあり方を明らかにすることを目的としている。特に、ここで研究対象とするのは、子どもの各発達段階の音楽表現欲求に即しながら、主体的な音楽学習活動を組織することによって子どもの創造性開発を目指す授業である。それを、この時期の音楽科教育界の動向や思潮をふまえながら明らかにしていく。そのためには、音楽科教育の事実を発掘する必要があるため、当時の関係資料を収集することが大きな作業となる。授業実践記録に限らず、全米的な教育者団体や音楽教育者団体の刊行する書籍、音楽教育研究者や実践者の著作、全米各州で立案された教育プログラムなどを幅広く収集し、検討・分析を行った。

３．研究の方法

（１）資料の発掘

研究初年度は、資料の収集状況を確認するとともに、研究計画にしたがって三年間の資料収集計画を立てた。国内の教員養成大学をはじめとする関係大学の所蔵する資料を確認した。また、国内で入手不可能な資料については、アメリカの大学の所蔵を確認した。アメリカを、東部、中部、西部の三つの地区に分け、それぞれで資料収集のための拠点となる大学を選定した。研究初年度は、東部地区にあるニューヨーク大学などに拠点をおいて資料収集を行った。各種学校あるいは、教育実践者による音楽学習関係資料は、未刊行のものが多い。しかし、メリーランド大学には、全米的な音楽教育者団体である MENC の歴史センターがあり、未刊行の記録も含めて豊富な資料を所蔵していた。研究２年目には、中部地区にあるシカゴ大学とノースウエスタン大学に拠点をおいた。前者は、当時、実験学校を附設しており先進的な教育研究を活発に行っていた。後者には、生活主義音楽教育の中核にいた音楽教育研究者が籍をおいていた。研究３年目には西部地区の基幹大学であるワシントン大学に拠点をおいて資料収集を行った。

（２）資料の整理・分類

発掘・収集した資料を以下のように整理・分類し、内容の検討を行った。

① 音楽教育者団体や教育学研究者団体などの発行する関係書籍

MENC や MSNC の発行する年報や雑誌、教育学研究関係書籍を検討し、音楽教育研究者や実践者による見解や主張を概観した。

② 州、郡、市など教育行政機関の各レベルにおいて提案された教育課程や教師用指導書

東部地区では、ニューヨーク州、バージニア州、ノース・カロライナ州、中部では、ミネソタ州、ネブラスカ州、ミズーリ州、中南部では、ルイジアナ州、西部では、コロラド州、カリフォルニア州、アリゾナ州などの教育関係資料を収集し、その内容を検討した。

③ 各学校における音楽教育実践

様々な学校関係の実践資料を収集・検討した。

④ 音楽教育研究者や実践者の構想・実践した音楽学習の検討

（４）資料の分析

収集した資料に基づいて、以下の二点から分析を行った。

①1920 年から 1960 年までの音楽教育界の動向や思潮

②音楽学習の具体的な展開

４．研究成果

1920-1950 年代の音楽科教育を、その動向と思潮、並びに音楽科授業実践の二つの側面から検討・分析した。研究成果として、以下にそれぞれの概要を提示する。

（１）音楽科教育の動向と思潮

この時期の音楽科教育界は、学校教育全体が生活主義・経験主義の原理を基盤とする中で、社会や生活、学校などにおける音楽の意義を問われ、音楽科教育の存立根拠を示す必要性に迫られていた。例えば、1940 年代の MENC の活動内容をまとめた年報には、最初の項目として「教育と生活における音楽」が挙げられ、それについて様々な音楽教育研究者が論じている。そこでは、アメリカ社会や生活における音楽の意義、学校教育の一学習としての音楽の意義、実践されるべき音楽学習の内容などについて論じられていた。同団体のその後の年報には、生活主義の立場から組織された音楽学習内容が、幼児教育、初等教

育、中等教育それぞれの段階において提案されている。これに平行して、各州の教育局の発行する指導書にも生活主義の内容のものが見られる。例えば、東部地区の一つであるニューヨーク州の教育局から 1953 年に発行された教師用指導書には、「歌唱」「音楽に合わせた身体表現」「楽器の演奏」「聴取」「創造」「読譜」の６領域の経験が組織されており、これらの活動は全て創造的なものとして教授されねばならないことが強調されていた。中部地区のミズーリ州では、「歌唱経験」「リズムの経験」「聴取の経験」「創造的経験」を学習領域として捉え内容を編成していた。西部地区のコロラド州では、「歌唱」「リズム」「読譜」「聴取」「楽器の演奏」の領域で内容が組織されていた。

（２）音楽科授業の構成

音楽授業のあり方については、全米各州の教育局の提案する教師用指導書などや、音楽教育研究者や実践者の著作にも見られた。しかし、学校単位で開発された授業実践は、音楽教育界の一般的思潮に先んじて実験的展開されていたこと、一つの教育原理のもとに体系的に展開されていること、の二つの点から研究的意義が高いと解された。そのため、本研究では学校教育実践の枠組みの中で実践された音楽学習の検討を中心に行った。ここではその研究成果の一部として、アメリカのそれぞれの地区から、東部のリンカーン・スクール、西部のウィラード・スクールとウィッテリア・スクール、南部のウォーターズ・アベニュー・スクールを取り上げる。

①東部地区における実践―リンカーン・スクール―

リンカーン・スクールは、生活主義・経験主義の原理に基づいて実践を展開した学校として、教育学的意義が高いものとして位置づけられている。音楽学習領域についても、創造的音楽の指導が、コルマンによって積極的に進められ、後の生活主義音楽教育に大きな影響を与えた。音楽学習については、1926－1929 年に、「一般的な音楽学習」と「創造的音楽」「学校オーケストラ」「楽器の演奏」「グリー・クラブ」などの活動が行われたことが報告されている。この中で、日常的な学習として位置づけられていたのは、「一般的な音楽学習」と「創造的音楽」であった。「一般的な音楽学習」は、歌唱活動、歌の即興、簡単な楽器で旋律を作り演奏する活動などから構成されていた。「創造的音楽」は、文字通り音楽作りの活動から構成されており、その教育意義については次のような記述がある。それは、「子どもの能力に即して音楽作りの意味が見いだされた。音楽に対する理解が深まり、芸術的な味わいが実現される」というものであった。当時、「創造的音楽」は、大学附属の実験学校以外の一般の公立学校では難しいとされていた。多くの学校の設備と高い教育的能力のある教師を必要とするからである。しかし、当校での８年間の実績は、後の生活主義音楽教育の全米的な普及の足がかりを作ることになった。

リンカーン・スクールにおける音楽学習の具体的指導は、作業単元についての実践記録に見られる。各学年の様々な作業単元の中で音楽学習は行われた。単元「フィールド・ワーク」では、ドラムや弦楽器作りの活動が報告されている。第四学年でも、ドラムを中心とした学習も報告されている。第二学年では、郵便配達の様子を劇化するという学習の中で、「切手の歌」や「郵便飛行機の歌」などの歌が創られた。同校では、他に、小麦学習、ミルク学習においても音楽学習の過程が記録されていた。

②西部地区における実践

1) ウィラード・スクール

ウィラード・スクールの第一学年の教師によって開発・実践された「ペット」の単元における音楽学習を検討・分析した。農場でペットを飼うという学習環境が設定され、子どもは、ペットの世話しながら様々なことを経験・学習する。音楽活動としては、歌唱、聴取、歌作りなどが記録されており、歌唱では、フレーズの類似や相違を感じる力や、音を以前よりより正確に再現する力、音の楽しさを鑑賞し求める態度、音楽によって自己表現する楽しみなどが育成されたと報告されている。また、聴取では、リズムに対する感覚、美しい音楽に対する初歩的な鑑賞力などが開発されたと記録されている。

同校では、「ベルの冒険」に関する単元も開発された。一人の子どもが、教室に置かれた中国のベルに興味を抱いたことから、学習が展開している。それは、中国人や日本人のベル、中世時代のキリスト教で用いられたベルの学習へと広がる。ヨーロッパのカテドラルについての知識などを習得し、美術の学習もなされた。ベルの分布などの調査に関連して、世界の地理や歴史などの学習も生まれた。音楽学習としては、打楽器や笛の製作などがなされ、最終的に、それらで曲を演奏した。楽器作りの過程で、子どもは、様々な内容を学習した。試行錯誤しながら様々な音の響きを試す中で、音高、和声、リズムに対する感覚が育成され、音色や発音の原理についても学習した。また、本を読むことによって、多様な活動を実現するために必要な知識を得た。その中で音楽表現の価値などについても学習した。この単元とは別に、視唱が重点的に学習され、鑑賞領域では、旋律、リズム、和声に関する学習がなされたと報告されている。

2)ウィッテリア・スクール
　ここでは、ウィッテリア・スクール第６学年の教師によって開発された「音楽の発展」に関する単元を取り上げる。これは、選択科目である学校オーケストラのリハーサルへの訪問やオーケストラのディレクターの訪問などによって、楽器の制作や演奏に対する子どもの欲求が生まれた結果、展開された。子どもは、彼らの欲求を実現するために、行うべき作業を整理し、二つの委員会を組織した。それぞれ、未開の楽器や現代の楽器を作る作業を行うこと、人類の楽器開発の歴史を描いた幻灯機を作ることを目的としていた。子どもの身近にある材料から、弦楽器、管楽器、打楽器が作られ、それを演奏するための二つの歌が創られた。これに関連して、美術や詩やダンスの学習がなされ、様々な国の音楽が聴取された。最終的には、それらの成果を発表する会が催される。この単元学習の中で、子どもは、楽器を演奏する力、オーケストラを指揮する技術、読譜力を得た。また、楽器の歴史、アンサンブルの発展史などの知識を習得した。
③南部地区における実践―ウォーターズ・アベニュー・スクール―
　ウオーター・アベニュー・スクール公立学校では、「公民的資質」育成のためのプログラムが展開され、その概念を子どもの現在の興味と関連づけながら学習が組織された。そのために、クラスごとに、この概念から独自の基準を具体化したが、一般的には、「品性」「協働」「自制心」「時間の有効な活用」の四つに分類されるものになっていた。音楽は、美術、文学とともに「鑑賞学習」の領域に位置づけられた。「興味の中心」に関わる活動の中で、歌唱活動や歌作りなどの音楽学習がなされたと報告されている。

（３）まとめ
　本研究では、1920-1950 年代アメリカ音楽教育の動向や思潮を踏まえて、創造性開発を目指す音楽科授業構成を明らかにしており、ここに、その一部を研究成果として報告した。具体的な音楽授業の事実を発掘し、その分析を行ったことには、特に意義深いと思われる。本研究の成果については、論文にまとめるなど公表に努めていきたい。また、本研究課題の基盤となる生活主義音楽教育については、今後も取り組んでいきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
名称
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

６．研究組織

(1)研究代表者
　荒巻治美（ARAMAKI HARUMI）
　佐賀大学・文化教育学部・准教授
　研究者番号：40315180

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
　なし